

# カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Balatchandirane Govindasamy  
出身地：インド・チェンナイ（旧マドラス）  
所属：デリー大学東アジア研究所教授  
日本滞在：2006年6月～2007年1月

## 日本での「甘い」出来事

バラチャンディラン・ゴビンダサミ

今回で六回目の来日となる。私は日本語を少し話せ、日本人の友人も何人かいる。また、インドで日本人とのつきあひも時々ある。来日した際、妻と私は日本での必需品リストを作成し、物だけではなく精神的な面でも準備を万全に整えた。だから今回は、この国で「ガイジン」となるはずはない、とも自負していた。

アジア経済研究所（以下、アジ研）の研究交流課からの以下の問い合わせに、全て「いいえ」と私が答えた（もしくは私がそう思った）ことで、彼らに強い印象を与えてしまったようだ。成田空港からエスコートの必要があるか、出勤前の数日間ホテルでの宿泊は必要か、アジ研への行き方の説明は必要か、などの問い合わせであったが、その問い合わせに対する私の返事はかなり気取っていた。

彼らから送信されたメールを読むかぎり、アジ研の情報や助けを私が必要としないこと、彼らは少し心配していたと思われる。実は一六年前に、私は一年間ずっと現在のアジ研の近くに住んでいたことがあり、その場所は良く知っていた。当時は、いまアジ研のある辺り一帯は殆どが荒地地で、海辺に行くときにはとぼとぼと歩いて通ったものだった。

当時の幕張で私には何人かの友人ができた。来日時には、その友人の一人が私の家族のためにマンスリー・マンションを用意してくれた。こうした友人もいたため、今回の来日では、自分は他の「ガイジン」とは違うのだ、という優越感に私は浸っていた。

来日してまもなく、休暇を利用して日本経由でインドに帰国しようと、アメリカに住む親戚が私の家に立ち寄ってくれた。互いの子どもたち同士も再会できたため、とても良い機会であったと思う。ある日の夕方、妻は私たち八人のために、インド・カレーをたくさん作ってくれたが、塩を使い果たしてしまったことに気づいた。

私は近くのコンビニに急いで塩を買いに行き、塩一袋を妻に手渡した。私たちは食事しようかと腰を下ろしたのだが、カレーには香辛料が効いていないと感じられた。そこで妻が塩をさらに加えたが、カレーはまったく美味しくならなかった。さらに塩を加えたところ、そのカレーは「甘く」なってしまった。慌てていたせいか、私が買ったものはなんと砂糖であった！

この「甘い」出来事後、自分がこの国ではやはり「ガイジン」であったことを認めざるを得なかった。つまり、日本に長く

滞在しても、自分がばかげた誤解をしてしまった現実を、私は受け入れざるを得なかったのだ！ 他の「ガイジン」とは違うという私の優越感、あつという間に消え去った。さらにとがめるような顔つきの妻が、私の日本語の読解力に疑問を投げかけた！ 日本や日本語についての知識で、アメリカからの親戚に好印象をもってもらおうと努めたが、彼らの反応もここでは言わないほうがよいだろう。

妻と子は一カ月後に帰国し、その後は仕事以外の時間は取れなかったが、一度日本文化を知るためのスタディー・ツアーに参加した。そこでは、喜びや驚きが今までの以上に感じられた。そのツアーで、きれいな風景の田舎を改めて見て、日本人は自然と美とを融合させることが見事だと感じた。

歴史的建造物の保存には細心の注意が払われ、過去にさかのぼった時代に存在した、宝物の重要性を感じ取れた。環境に優しく、また環境に配慮した生活で見受けられる日本人の独創性に、私は絶えず驚嘆してきた。だが、とりわけ感銘を受け、不思議だと思ふきつかけとなったものは、小さい場所でも自然を大切にしたり、美しさを正しく理解する、日本人の感性であった。

（海外客員研究員／訳＝相山貴史）